福島から思いをつなぐ…

人形劇 と おはなし

福島県田村市船引で、有機農業をしている大河原多津子さんが広島を訪問されると聞き、ライフワークでされている人形劇と、福島原発事故の話、その後の暮らしについて話していただくようお願いしました。
地震、噴火、台風と自然災害が続く中、原発が次々と再稼働されようとしています。
この機会に現地で暮らしている大河原さんのお話を聞いて、脱原発の気持ちを新たにしていきましょう。

2018年11月21日（水）

昼の部（10:30～12:30）

人形劇第一部二部 & 3.11のお話

場　所: きはら楽観堂
三原市木原3丁目15-1
Tel　090-1182-5781（清田）

参加費: ランチ付き(カレー) 1700円
人形劇&お話のみ　700円

駐車場に限りがあるので、
乗り合わせていらしてください。

夜の部（18:30～21:00）

人形劇第二部 & 3.11のお話

場　所: 田舎家
東広島市志和町志和西2300-1
Tel　082-433-3825（吉本）

参加費: 700円

道がわからなくなったらお電話ください。

問い合わせ　090-6835-3592　坂本

【大河原多津子(おおかわら　たつこ)プロフィール】

１９５４年郡山市生まれ。有機農業と人形劇活動を営んで３３年。２男３女の母。
２０１１年の震災後「えすぺり」という直売所兼レストランを、福島県田村市で建設・運営している。

「原発のない世界を」 福島から思いをつなぐ

私が有機農業に関心を持つようになったきっかけは、学生時代に有吉佐和子原作の「複合汚染」を読んだことに始まります。食の安全性を求める最高の手段は「自給だ」と思ったからです。
30 歳で結婚。母親となってからは、採りたての野菜で、お金をかけない、しかも豊かな食事で育てようと考えるようになりました。
26 年前、旧ソ連のチェルノブイリで原発事故が起き、その影響は世界中に及びました。当時2カ月の長女がいた私は、自衛では防ぎようのない原発事故の恐怖を知り、また既に同じ県内に原発があることも知り、反対運動を始めました。
ですが、時が経ち、忙しさが増すにつれ、生活の中の「反原発」にかける時間は減っていきました。無農薬で農業をし、子どもを育てながら、市民運動を続けることの厳しさのうちに、私は少しずつ自分に言い訳をし始めました。「だって仕方ないじゃないか…私 1 人で自由に使える時間じゃないんだもの…」 そして運動から遠のくことを「許されること」としてしまいました。
2011 年 3 月 11 日の巨大地震とその後に続く原発事故で、私を最も打ちのめした感覚は、「私はこの事態を、どこまで本気で予想していたのだろう？　お前は反原発を言いながら、どこかで事故は起きないと思っていたのではないのか」という強い自責の念でした。
1 人の農民のおばちゃんが、たとえどんなに頑張っていたとしても、今回の事態にどれほどの違いがあったのか、とは思います。ですが、「生活のために運動を捨てたりしなかった人々」もたくさんいることを、私は知っているのです。
だから私は、今度こそ、死ぬまで弛むことなく、運動を続けようと思います。日本中の、いや世界中の原発をなくすために、出来ることは何でもしようと思います。

「福島みんなの NEWS」より部分抜粋

【人形劇あらすじ】

第一部：人形劇「パツー！」（過去）
ウサギやタヌキがのんびりと暮らしていたある森に、正体の分からないパツーがやってきて「森のみんなと仲良しになりたい。森を豊かにしたい」と言います。夢を見るように美味しいおじぇおじぇキャンディをもらって、「パツーさんはいい人だ」と言うタヌキ。「一体何者？目的は何？」と懐疑的なウサギ。さて、パツーが残した物は？
原発がどんなふうに作られ、何を私達にもたらしたかを、分かりやすく表現しました。

第二部：人形劇「太郎と花子のものがたり」（現在）
実在する友人夫婦がモデルです。３５年前から「山のアワビみたいに美味い！」と言われる原木シイタケを目指して技術を磨いた太郎と花子。その２人を巨大地震、原発事故が襲います。生活の糧も、誇りも、生き甲斐もすべてを失くした二人。「私達はただ一生懸命シイタケを育ててきただけなのに、なんでこんなことになっちゃったのかなあ…。」 花子の泣く声が響きます。